人力検索かきつばた杯

テーマ：
老人とラブレター

Vol.2

まえがき

この本をお手に取っていただいて、ありがとうございます。
この本は、株式会社はてなが運営するQ&Aサイト「人力検索はてな」内で行われたショート・ストーリーのコンテスト「人力検索かきつばた杯」を各回ごとにまとめたものです。

コンテストは各回ごとに出題者が決めた、時には難解な、時にはややこしいテーマに従って2000文字程度のショート・ストーリーを投稿するもので、いかにテーマを活かすか、またはいかに出題者の裏をかくか、いわば出題者と投稿者の知恵比べです。
ですから、この本をもっと楽しむために、まず「自分だったらこういうお話にするかなー」と考えてみることをお勧めします。実際に手を動かして書いてみると、もっといいかもしれません。
もしあなたが文章を書くことに興味を持ったなら、巻末の解説文もぜひ読んでみてください。
そう、かきつばた杯は誰にでも開かれているのです。もちろん、あなたにも。

<Data>
テーマ：老人とラブレター
出題者：hokuraku
募集期間：2010/10/9〜10/14
URL：http://q.hatena.ne.jp/1286627668
※各投稿者のコメントや出題者の講評、投稿内容の後日談などが「人力検索はてな」のページには載っております。よろしければ、あわせてアクセスしてみてください。

＜注意事項＞

1. この本は電子ブックリーダーやスマートフォンでの読書を前提に、少し大きめの活字で作成しております。
2. この本ははてなユーザーが出題者や投稿者の許可を得て自主的に作成しているものであり、「株式会社はてな」による公式なものではありません。
3. 投稿者の許可が得られていない作品については、許可が得られた時点で掲載します。また、既にはてなを退会されており連絡が取れない方の作品については、省略させていただきます。

第２回　人力検索かきつばた杯テーマ

「老人とラブレター」

あなたなら、どんなストーリーを創りますか？

目次

1. ある日、老いた男が、封筒を拾った。　by yossiy7（未許可につき未掲載）
2. 老人とラブレター　by alpinix　☆
3. 祖母が亡くなった。　by goldwell（未許可につき未掲載）
4. 朝、集合玄関の郵便受けを開けると、一通の手紙が入っていた。　by kuro-yo

- ☆印は出題者が選んだその回の優秀者です。
- 作品にタイトルがつけられていない場合、最初の文をタイトルとしてあります。

老人とラブレター　**by alpinix**

わしの目の前に一通の封書がある。
封緘はされておるが、消印は無い。つまりこの封書は書かれはしたが、投函はされなんだ、ということだ。差出人の欄は若干震え気味の字でわしの名が、宛名には・・・あの人の名が書かれている、いや、書かれているではなく、書いた、と言った方がいいだろうな。もちろん中の便箋もわしが書いた。

ここはわしの書斎で、誰かが急に入ってくるような心配は無いが、それでもドアに内鍵をかけてある。いつもこの封書を見るときはそうしている。
還暦のチャンチャンコはとうの一昔前に終わった身だが、婿養子のわしには過ぎた人生だったと、今更ながらに妻には感謝している。それでも、この封書だけは捨てることはできなんだ。妻とは違う宛名の恋文を。

あの年、3月の末によど号がハイジャックされるというニュースが日本中を駆け巡った。4月にはアポロ13号が打ち上げられ、11月には三島由紀夫の自決事件まで起こった。激動の一年だった。
年の瀬も押し迫った12月の末、まだまだ日本人にはクリスマスに恋人同士が連れ立って歩く、という風習は一般的ではなかった。私は思い人と街歩きがしたいと書きしたためた封書を持ち、寒風吹きすさぶ街路に歩み出た。いや緊張で寒さは感じていなかったかもしれない。マフラーもせず、ジャケット1枚で出かけたはずだからだ。
その日、自宅であるアパートから百メートル離れた郵便ポストまで、気持ちを抑えるように小走りに近いはや歩きで辿りついたところで、一人の女性に出くわした。それが今の妻、この家の当主だ。彼女はたまたま私が歩いているのを見かけたといい、紅潮した頬を隠そうともせず、わしを映画に誘ってきた。その日はわしが思い人を誘う日と同じ日であった。
断ることもできず、諾としてしまったわしは、封書を懐に仕舞ったまま、アパートまで見送るという彼女の申し出を断り、とぼとぼと歩いて帰った。

その後幾度かの巡り合わせの末、わしは今の妻と一緒になり、不自由ない人生を送っている。現に今も特段の不服は無い。
ただ、一抹の不安というか、後悔というか、心残りといったものがこの封書に宿っているのを否定することができない。

この封書をあの日、投函していたらどうなったのか？

悔やんでいるわけではない、というのは言い訳だろうか？　もしあちらを取っていたら、という分岐の人生を想像することは罪だろうか。

「じいさん、今からその手紙、俺が出してきてやろうか」
それなりに胆力にも自信があるわしをして、背筋に悪寒を走らせたその声は、わしの頭の上、書斎の中空に浮かんだそのモノから発せられていた。
「な、なにもの？」
「ふん、取り乱さなかったことは褒めてやるよ。俺の名はダンタリオン、おまえの望み、かなえてやろうてんだ」
ダンタリオンと名乗った生き物？　は空中で胡坐を組んで浮かんだままの姿勢で小脇に書物を抱えている。顔は・・・・、なんともいえない、兎に角”生き物”としか表現できない。

「で、どうすんだ。今ならお前の望みかなえてやるよ。ポストに入れてくるだけだろ、あの日に戻って」
わしは反射的に掴んでいた封書を震える両手で握っていた。
だが不思議なもの最初の恐怖が過ぎ去ると、その両手を、生き物を方にゆっくりと差し出していた。
「ほう。いいんだな？」

わしは自然にこくりと頷いていた。人生にやり残したことがあるわけでもない、というよりもこれが唯一の心残りなのだ。

ダンタリオンはくるり、と宙返りをすると忽然と姿を消し、その後には何も残っていない。わしは自分の両手の平を見たが、しわだらけの手が若返ったとかそういうことはないようだ。
「なんじゃ、どういうことじゃ」
ふと机を見ると、例の便箋が相変わらずそのまま置かれている。
「白昼夢か・・・・」

そう思いかけた瞬間、わしの背中に電気が走った。

良く見ると封書には“消印”がおされていたからだ。手にとって食い入るように見るが、消印は昭和〇〇年の12月のあの日の消印になっている。

「ど、どういうことだ？」
その時書斎のドアをノックする音が聞こえる。何故か直感的に分かった。妻だ、だがどっちの？

わしはドアの前まで行って内鍵を外した。その音が外にも伝わったようで、鍵が開いたのを察した“妻”がドアノブを回す音がする。
ゆっくりと書斎のドアが開く。
わしの前に立っていたのは・・・・・

“以前と変わらぬ妻だった”

「ご飯の用意ができましたよ」

「わ、わかった、すぐ行く」

いつもどおりの変わらぬ会話。強いて言えばわしの声の方が少し上ずっていただろうか。

消印は確かに先ほどまでは押されていなかった。ダンタリオンとやらは確かにあの日に投函してきたのだろう。では、なぜこの封書は“開封されないまま”わしの書斎に存在しているのだ？

なぜ妻はあの思い人ではなく、変わらぬ状態なのだ？

なぜだ？
（了）

祖母が亡くなった。　**by goldwell**

祖母が亡くなった。
晩年はボケの症状で徘徊癖が出たり夜中に突然私物が見つからないなどと言っては騒ぐこともあってなにかと苦労したが、老人ホームに入居してからは若き頃の思い出を語るなど穏やかな日々を送るようになって家族ともどもホッとしたものだった。年寄りになると近い記憶は曖昧になってしまうが、逆に古い思い出の方が鮮明になるらしい。

それが今夏90歳で大往生した祖父とわずか3ヶ月違いでポックリと逝ってしまった。
「最後の最後まで仲良かったねぇ」などと葬儀の席では親戚がしんみり語っていたのだが、気難しくて庭で遊んでいてはよく叱られ、まさに頑固爺といった感じの祖父と、いつもニコニコしてておとなしい祖母との仲についてよく知らなかった私にとっては、そんなものかと思うしかなかった。

そして母に言われて祖母の遺品整理を手伝っていた日のこと。
祖母が使っていた部屋の押入れの奥に木箱がひっそりと置かれていたのを見つけた。なんだか気になって、梱包されていた紐をほどいてそっと蓋を開けてのぞいてみた。出てきたのは手紙の束だった。そして一番下から出てきたのは古びた一枚のモノクロ写真。
写っていたのは詰襟に学生帽の若い男性。高校？いや古い時代のようだから大学生だろうか。
二重瞼のパッチリとした目に面長の顔立ちは、はっきりいって美男子だ。
がっしりとした角顔に細目の祖父とは似ても似つかない。というか、旧姓の祖母宛の差出人は祖父の名じゃないぞ。
ばーちゃん、誰だよこの人は・・・？

整理はあらかた終わっており、「夕飯の支度するから適当に片付けおいてねー」と言って台所に向かう母の姿を確認すると、中身をそっと木箱に戻して箱ごと部屋に持ち帰り、どきどきしながら、そして少しの罪悪感を覚えながら手紙を読んでみた。
旧字体混じりながらも丁寧な字で綴られた手紙の内容は、日々の細かな生活の事柄を中心とした他愛も無いもので、ちょっと残念なようなほっとしたような複雑な思いだった。
文面から察するに、私大生の彼と高等女学校の生徒だった祖母との手紙のやりとりは昭和18年の春からほぼ2年に渡っていた。逼迫する戦況により学業がままならない中、互いに文学について語り合う様子が伝わってくる。なにがきっかけだったかわからないが、偶然知り合って意気投合し、その後はもっぱら手紙のやりとりだけだったようだ。

ふと思いだしたのだが、確か祖父と祖母は戦後間もない頃に見合い結婚したと聞いている。食料不足の中で苦労して父ら4人の兄弟を育て上げたと話してくれたことがある。
だとすると、彼と祖母はいったい･･･？

続けて手紙を読み進めた。
ついに彼は学徒出陣として海軍航空兵の一員となり、訓練に明け暮れる日々。それは特攻隊と呼ばれるもので、生還を期さない攻撃であること。
そして最後の手紙には、沖縄に来襲した米軍機動部隊を迎え撃つための出撃の日が決まったので、これが今生の別れであることが記されていた。
今まで死ぬということを直視できず迷いがあったが、貴女を守るために僕は死にいくという一文が結びとなっている。

若き日の祖母の悲しみはいかほどのものか。
最後の手紙を抱えてしばし考えこんでしまった。
晩秋は日が落ちるのも早く、外はすっかり夕闇に閉ざされてしまっている。
ふと、写真の下に小さく畳んだ便箋が残されているのを見つけた。
今まで読んでいた手紙の主とは違うこまやかな筆跡。
そこに書かれていたのは「貴方に逢ひたい」。
結局出せなかったんだね。ばーちゃん。

朝、集合玄関の郵便受けを開けると、一通の手紙が入っていた。　**by kuro-yo**

　朝、集合玄関の郵便受けを開けると、一通の手紙が入っていた。
　この手紙には、切手が貼られていない事もそうだが、奇妙な事があった。それは、この手紙が自分宛ではなく、それどころか、この集合住宅の誰宛のものでもなかった事だ。
　宛名は、片仮名で書かれた、西欧人のような見た事もない名前だった。裏面を見ると、やはり片仮名で差出人の名前が書かれていた（なぜ差出人とわかったかと言えば、最後に「より。」と平仮名で書かれていたからで）。もちろん、わしの知る名前ではなく、東南アジア系の名前のように思われた。
　はて、どうしたものか。
　郵便ならば、郵便局に問い合わせすれば済むのだが、直接投函されたのではどうしようもない。この集合住宅はシルバーホームであり、わしのような老人しか住んでいないし、知る限り、このような名前の入居所は聞いた事がない。
　ひょっとすると、誰かのあだ名かもしれないと思い、午後のティータイムに、くつろいでいる入居者一人一人に手紙を見せて聞いてまわってみたが、宛名はもちろん、差出人についても、誰一人として知らぬと言う。
　はて、困ったな、と一人、テーブルで抹茶を味わっていると、ちょうど、巡回の介護師の若い女性が、わしの方にやってきた。
「どうかなさいましたか。なんだか浮かない顔をされてますね。」
「いや実は、かくかくしかじか、というわけで途方にくれているのです。」
「それは困りましたね。開封してみた方がいいかもしれませんね…」
「うーん、それなら、わしではなく、あなたにお願いしようかな。これがその手紙なんですが…」
　若い介護師は、手紙を見るなり「まぁ…」と小さくつぶやいた。そして、ニコニコしながらわしに言った。
「これは、あなたのお孫さんの公祐ちゃんから、あなたへのお手紙ですよ。」
「ええっ、どうしてそう思われるんです？」
「だって、表には『グラン・パへ』、裏には『公祐より』って書いてありますよ。字が書けるようになったので、嬉しくてお手紙したんですね。」
「『グラン・パ』がわしの事？」
「『おじいちゃん』という意味の外国の言葉ですね。」
「でも裏には『ハムネナロより』って……

解説（人力検索かきつばた杯について）

この本を手にとられて、「人力検索かきつばた杯」に参加してみたいと思ったあなたのために、参加方法を簡単に解説しておきます。
参加には以下のステップが必要です。順を追って、説明いたします。

1. 「はてな」へのユーザー登録
2. 「人力検索はてな」内で開催されているかきつばた杯への投稿or「人力検索はてな」内でのかきつばた杯の開催

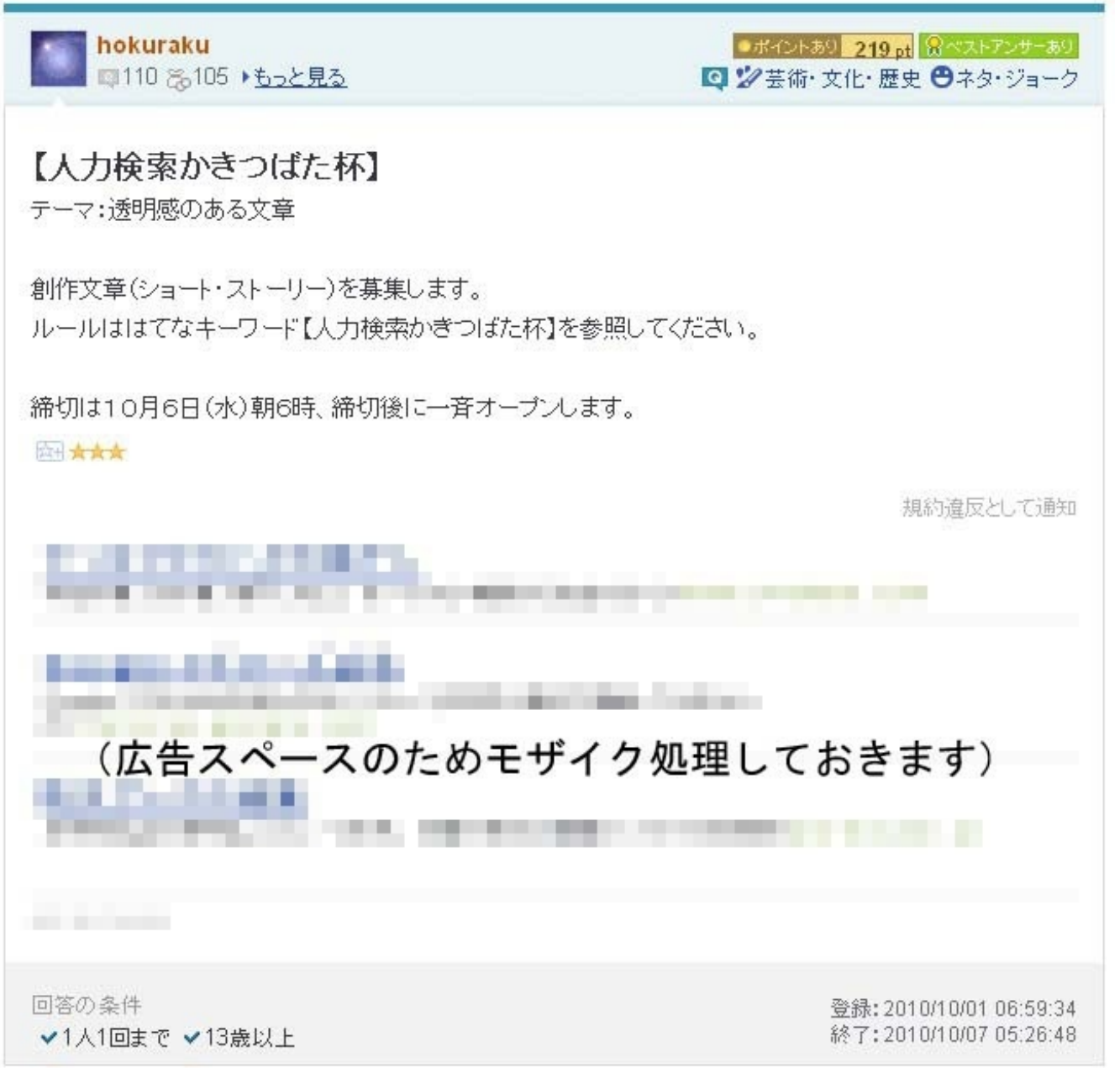
１．「はてな」へのユーザー登録

「人力検索かきつばた杯」は複合サービスサイト「はてな」の中で行われているので、まずは「はてな」へのユーザー登録が必要です。「はてな」へのユーザー登録にはメールアドレスが必要ですが、有料オプション（※）を使用しない限り費用は発生しません。なお、「はてな」へのユーザー登録を行うとＱ＆Ａサイトである「人力検索はてな」以外にも「はてな」内のブログ（はてなダイアリー）やオンラインフォトストレージ（はてなフォトライフ）などのサービスが利用できるようになります。
（※）有料オプションには、例えばブログ内で広告を出さないようにしたり、ストレージの容量を上げたりするもののほか、人力検索でポイントつき質問をするものなどがあります。
「はてな」へのユーザー登録は「はてな」のトップページからできます。

２－Ａ．かきつばた杯へ投稿する（費用負担なし・初心者向き）

無事ユーザー登録を終えたら、「人力検索はてな」でかきつばた杯が開催されているか調べてみましょう。トップページ最上部の検索窓に「かきつばた杯」と入力して検索をかけると過去のものも含めた一覧が出てきます。最も上にあるのが最新のものですので、開催中のページ（Ｑ＆Ａサイトですので、「質問ページ」と呼ばれます）を開いてみましょう。ここではサンプルとして

第1回の質問ページのスクリーンショットを掲載します。



ログイン状態で質問ページにアクセスした際に、まだ投稿を受け付けている場合は、この画像の下にある広告スペースと灰色の部分との間に「回答する」というオレンジ色のボタンが出ています。（画像のものはもう終了した回なのでボタンがありません）
投稿は回答用のテキストボックスに記入し、「この内容で確認する」というボタンを押せば（内容確認を経て）投稿できます。長い文章なので、あらかじめ別のファイルに書いておいてコピーするほうが安全ですよ。また、慣れてくればテキストの文字サイズや色を変えたり画像を入れたりすることも可能ですので、ぜひトライしてみてください。
え？投稿を受け付けているものがない？そんなときは、あなたがテーマを決めてかきつばた杯を開催することも可能です。

２－Ｂ．かきつばた杯を開催する（費用負担あり・上級者向き）

「人力検索はてな」は最近リニューアルして費用負担なしに質問をすることができるようになりましたが、「人力検索かきつばた杯」では以前からの慣習もあり、テーマを決めた主催者から投稿者に対して「はてなポイント」（はてな内で使える仮想通貨のようなもの）を送ることにしています。（つまり、あなたが投稿者なら出題者からポイントをもらえる、ということです）
送るポイント数には決まりがありませんが、投稿者一人当たり大体20〜30ポイント（20〜30円相当）くらいが多いようです（ポイントは購入するか、ポイントつき質問に答えて貯めましょう。なお、ポイントつき質問の最低必要ポイント数は100ポイントです）。
質問文自体はテーマ以外が定型文ですので、既にあるものをコピーさせてもらいましょう。もしあなたが人力検索で初めて質問をする場合、質問文中に「初めての質問ですので至らないところがあったら申し訳ありません。」とでも書いておけば、親切な皆さんが色々と教えてくれるでしょう。あらかじめ過去の質問（開催状況）に目を通しておくと雰囲気がつかめると思います。

人力検索かきつばた杯　～老人とラブレター～

http://p.booklog.jp/book/42142

著者 : hokuraku
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hokuraku/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/42142

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/42142

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.